11/7～12 カンボジア視察研修を終えて

大江電機株式会社　圓谷愛梨沙

この度は、カンボジアでの支援現場を訪問するという大変貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。大江電機がカンボジアの教育支援に取り組んでいることはホームページや本社１階のパネルなどを通して知っておりましたが、情報として理解しているだけでは得られない多くの気づきがありました。実際に現地へ足を運び、人々と直接触れ合うことで、さまざまなことを感じ、学び、考えるきっかけを得ることができました。

特に印象深かった出来事を以下にご報告いたします。

・ジャパンハート新病院の視察

訪問前日に別の病院から引っ越してきたばかり子どもたちが、笑顔で出迎えてくれました。直接触れ合うことはできませんでしたが、ガラス越しに挨拶をすることができました。抗がん剤の副作用で身体も心もつらいだろうに笑顔いっぱいで、強い子どもたちだなと思いました。会社の支援活動によって新病院が開院され、一人でも多くの子どもが治療を受けられる一助となれていることを誇りに思います。

小児がんの発症率は国によって変わらないといわれていますが、【5 年生存率】には大きな差があります。先進国では８割以上の生存率に対し、カンボジアでは医療が以前より発展しているとはいえ、依然として５割に留まっている状況です。新病院が誕生したからこそ見えてくる課題も多く、継続的な支援と地域医療との連携が必要だと知ることができました。生まれた地域によって命が左右されないよう「サバイバルギャップを限りなくゼロにする」というジャパンハートのビジョンに、その意義を強く感じました。子どもたちが完治できる病気を治し、元気に未来へ進んでいけることを願っています。

・孤児院訪問

歓迎式、食事と施設案内をしていただいた後、多くの子どもたちは陽気な音楽に合わせて楽しそうに踊っていましたが、一方で、図書館や部屋で本を読んだり、勉強に取り組んだりしている子どもたちもいました。普段と変わらないのかもしれませんが、孤児院出身で医師になっ

た会長の里子のサルーアンさんから、勉強に関して激励の言葉をいただいた直後だったこともあったからかもしれません。志を強く持ち、継続して頑張ってほしいです。

子どもたちに歓迎してもらい、とても楽しい時間を過ごすことができました。ですが、言葉がうまく通じず、思うように会話ができなかったことが心残りです。もっと子どもたちの夢や好きなことについて聞きたかったと、今でも反省をしています。ボードに掲載されていた子どもたちの夢の多くが「先生」や「医者」といった限られた選択肢であることから、孤児院の外の人々と触れ合う機会がほとんどなく、世の中を十分に知る機会が少ないという現状を知りました。勉強を通じて、もっと広い世界があることを知ってもらいたいです。

本当に短い時間ではありましたが、子どもたちと過ごした時間はかけがえのない思い出になりました。これからもたくさんのことを学び、たくさんの人と出会い、素敵な人生を歩んでいけることを願っています。

またみんなと会えることを夢見て、私も日々の仕事とクメール語、英語を勉強したいと思います。その機会が実現したら、たくさんお話しましょうね！

・ソムラン小学校　授業発表会、研究会への参加

授業参観後、他校の先生方を交えた授業研究会に参加させていただきました。校舎はいくつかの教室が長屋のようにつながった建物で、教室内は窓からの自然光とわずかな照明に照らされていました。新しい校舎はピカピカで、教室に入る際には靴を脱ぐ決まりになっていました。たくさんの子どもたちに大切に使われ、末長く愛される校舎であってほしいと思います。私が通っていた日本の学校とは大きく異なる環境でしたが、生徒たちは大きな声で発言し、積極的に手を挙げるなど、学ぶ意欲にありふれていました。先生方も生徒の興味を引き出す工夫を凝らし、楽しそうに授業をされていたのが印象的でした。授業で扱うものを実際に持ってきて生徒の興味を引き出したり、大きな画用紙を使用したりして、回答をパズルのように使っている先生もいらっしゃいました。

奨学生の中には、英語をとても流暢に話す子がたくさんいて衝撃を受けました。通訳さんによると、クメール語は英語よりも難しいようです。英語とクメール語を同時に学び始めると、クメール語の勉強が嫌になってしまうので、まずはクメール語を学び、後々英語を学ぶカリキ

ュラムがあるとのことでした。クメール語の子音は 33 個、母音記号は 24 個もあり、さらに特殊な発音記号もあります。世界各国の発音がクメール語にはあるので、マスターしてしまえば世界中の発音が簡単に習得できるようです。

国の発展を目指して熱心に学ぶ生徒と先生方の姿を直接この目で見ることができ、とても刺激を受けました。彼らの常に目的意識や疑問をもって取り組む姿勢から、私も負けずに探求心を持って学び、成長していきたいと感じました。

・スレイビボケイ中学校　校舎見学、奨学金贈呈

カンボジアの高校生たちは、卒業試験の成績ランクによって、大学進学の可否が決まります。少しでも上のランクを取得するため、一生懸命勉強をしているのですが、SSFC 小林さんの里子の生徒さんは残念ながら F ランクとなり、通常の条件では大学への進学ができない状況でした。しかし、救済措置として一定期間内に成績を残すことができれば、F ランクでも大学進学が認められる制度があります。そのため、緊急で会議が開かれ、理事の皆さんに囲まれる

中、本人の口から「大学に進学したい」「これから一生懸命勉強する」と強い意志をもって宣言をし、支援をしてくださっている感謝の気持ちを伝えていました。その時私は“本人にやる気があるのなら、支援をすべきではないか”と考えました。しかし同時に、朝早くから夜遅くまで勉強をして、大学進学を勝ち取っている奨学生もいます。
何不自由なく勉強できる環境にいた自分を振り返ると、家族をはじめ、周囲の方々からの支えに対して、感謝の気持ちを今後も決して忘れてはならないと改めて思いました。

・奨学生宅への訪問
　当日は雨の影響で道が冠水してしまい、実際にご自宅にたどり着くことはできませんでした。家庭環境が複雑で、現在はおじさんが面倒をみてくださっている奨学生です。今回の移動中、学校までの小道の中で、雨風をしのげているのかも不安になるようなお家をいくつも目にしました。自分の部屋もなく、電気も満足に通っていないような環境の中でも、一生懸命勉強に励んでいる子どもたちがたくさんいることを知りました。奨学生本人が緊張しながらも、大勢の支援者の前で九九を発表している姿を見て、現状に負けることなく、これからも前向きに頑張ってほしいです。

　短い期間ではございましたが、この 6 日間は大変濃く、学びの多い研修となりました。現地の方々と直接お話する機会はこれまでほとんどなく、実際の暮らしや環境にふれることができた経験は、私にとって何にも代えがたい貴重なものでした。
微力ではございますが、今回現地で出会うことができたカンボジアの皆様、そしてこれからの未来のカンボジアを築いていかれる方々のお力になれるよう、今後も大江電機の一員としてより一層精進してまいります。

　小林さんをはじめとする SSFC の皆様、SAJ の清宮さん、ジャパンハートの皆様、そして現地でサポートをして下さった皆様、本当にありがとうございました。
　また、このような貴重な経験の機会をくださった大江会長、準備の段階から気軽に相談に乗ってくださった浜谷さん、どんな場面でも心の支えになってくださった山田さん、関わってくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

11/7～12 カンボジア視察研修を終えて

大江電機株式会社　山田　雄志

今回の訪問は移動を含め 6 日間と決して長い日程ではありませんでしたが、多くの学びと、これまでの人生で体験したことのない貴重な経験を得ることができました。

カンボジア訪問以前の私は、自社がカンボジアへ寄付を行っていることは知っていたものの、その目的や具体的な活動内容について深く理解できていませんでした。また海外ということで、食事や環境など未知の点も多く不安もありましたが、カンボジア視察へのお声がけをいただき、現地の生活を自分の目で見てみたい、何か新しい気づきが得られるかもしれないという思いで応募をしました。

実際に現地の人々の暮らしや子供たちの笑顔に触れ、多くの学びと気づきを得る大変貴重な機会となりました。

今回の視察を通じて、歴史的な負の遺産が現在にまで影響を及ぼしていること、そしてそこから脱却し発展を目指して努力されている方々の姿を肌で感じることができました。

視察では病院・学校・孤児院などを中心に訪問しましたが、特に印象的だったのは病院や学校が抱える「技能人材の不足」という課題でした。現在はさまざまな NPO 団体の活動により改善が進んでいるとのことでしたが、専門教育を受ける機会が限られたまま医師や教員として従事せざるを得ない状況が一部にあると伺いました。

その背景には、1975～79 年のポル・ポト政権下における大量虐殺があり、多くの医師・教員を含む知識人が犠牲となった歴史が大きく影響していると説明を受けました。推定 100～200 万人が命を落としたとされ、その影響が現在の人材不足につながっているとのことでした。

2 日目に訪問したジャパンハートの病院では、日本と比べて生存率の低い小児がんなど高度医療の提供と、地域全体の医療レベル向上の両立を目指す取り組みを伺いました。

現地では治癒が難しい病気を抱える子供たちに対し、日本から医師が 1〜2 年単位でボランティアとして参加し治療を行っています。また、地域に以前からある病院と連携し、対応可能な患者は地元病院に託すことで地域医療全体の底上げを図っているとのことでした。

さらに、医師はボランティアである一方、現地看護師には給与を支払いスタッフとして勤務いただいており、ジャパンハートの方から「ボランティアだけでは医療の発展がなく、現地での雇用を生むことが持続的な医療体制につながる」とのお話がありました。

これらの経験を通じ、過去の出来事を踏まえて現状の課題を理解し、将来を見据えて対策を講じる姿勢を学ぶことができました。

この考え方は日常の仕事にも共通すると強く感じています。目に見える部分だけで判断するのではなく、その背景や経緯を把握しながら物事を捉えることの重要性を改めて認識しました。

また今回の視察では現地の子供たちの SSFC を通じた寄付で設立された学校を訪問し、現地学生の学ぶ意欲と熱量に大きな感銘を受けました。

学校訪問では、SSFC の奨学金支援を受給しながら学習を続ける学生達との交流を行いましたが、彼らは学ぶことはおろか、家庭の経済的理由から満足に食事を摂れない、幼い頃から労働に従事せざるを得ないなど、厳しい環境に置かれているとのことでした。しかし、SSFC が学ぶことに意欲のある子供たちに対して生活費やお米などの奨学金を支給することで、学校に通い教育を受けることができています。

「良い学校に入りたい」「良い職業につきたい」「今の生活環境から抜け出したい」という強い意志を持つ子供が多く、朝 4〜5 時から自主学習を行う学生もいると伺いました。同行した SSFC 理事の里子の方も、明け方から一日 10 時間近く勉強されていたとのことで、その努力に深い敬意を抱きました。

孤児院では、7〜8 人で 1 部屋・学習机が 1 つという決して恵まれた環境ではない中でも、夜遅くまで勉強する子、布団の中で教科書を読んで学ぶ子もいるとのことで、学びに向き合う姿勢の強さを実感しました。生活環境も目的も自分の学生時代とは比べものにならないくらいの努力をされており、その意欲と努力の大きさに強く胸を打たれました。

一方で、今回の訪問を通じて、支援を受けながら学びを続ける子供たちへの精神面のサポートも重要ではないかと感じました。孤児院では 5 歳から高校生、SSFC の学校では中高生が在籍しており、思春期を迎える子供も多いと思います。支給されている奨学金で家族が生活を続けられているという子供もいるようで、家族の生活が自分の学業成績に懸かっているというプレッシャーや、常に周りの子供達と競争をしながら勉強をすることにストレスを感じることもあるのではないかと思います。

SSFC の理事長の小林さんの言葉や子供と接する姿勢からも、常に高みを目指し努力を続け、子供たちが自分の力でより良い生活環境を掴んでほしいと強く願っていることを感じましたし、SSFC とはそういった思いのもとに活動をしている団体であることを実感しました。また子供に対する大人の数が足りないという課題もあると思いますが、その一方で子供一人ひとりに寄り添う心のケアを拡充していくことの必要性も感じました。

今回の 6 日間を通じて、まず率直に勇気を出して行ってみてよかったと感じています。正直よく知らない土地だし食事も口に合うのかわからない、行きの飛行機に乗る直前まで不安な気持ちでいっぱいでしたが、そんな気持ちが一切なくなるくらい新鮮で貴重な経験を味わうことができました。何より、交流をしたたくさんの子供たちの笑顔が今でも忘れられません。本当に行ってよかったと思いますし、このような機会をいただけたことに深く感謝しています。

今回このような機会をいただいた大江会長、小林さんをはじめとした SSFC の皆様、SAJ の皆様、ジャパンハートの皆様、本当に貴重な機会をいただきありがとうございました。

浜谷さん、圓谷さん、本当にありがとうございました。海外の視察にすごく緊張していましたが、お二人のサポートのおかげで楽しい時間を過ごせました。孤児院・会食会場でのダンス楽しかったですね！また残念ながらきれいな日の出は見られませんでしたが、頑張って早起きして行ったアンコールワットは最高でした。私のわがまま聞いていただいてありがとうございます！

11/7～12 カンボジア視察研修を終えて

大江電機株式会社　浜谷　勉

「現地に行って実際に見るのはいいことだよ」。大江会長からのこの一言が研修の始まりでした。当社のカンボジア教育支援の取組みは承知していたつもりでしたが、実際のところ、カンボジアについては、発展途上の国、世界遺産アンコール・ワットがある国、近時ではタイとの紛争がニュースで取り上げられている国程度しか認識しておりませんでした。今回の研修直前のわずかな時間で国の位置や人口などの基礎的な情報や歴史などを確認したのですが、ここ１５年の経済成長率が新型コロナウイルスの影響を受けた時期以前は年率７％程度、以降も５％台の安定的な経済成長率となっていることを知り、「着実に発展してきているのに、どの程度の教育支援が必要なのか」といった疑問を持ちつつ出発しました。

＜サルーアンさんとの面談＞

プノンペンに到着後の夕食は、かねてより支援している里子のサルーアンさんが苦学の末に医師の国家試験に合格したお祝いの会でした。大江会長からプレゼントを渡した際のお二人の破顔一笑の表情はとても印象的で、若いサル―アンさんは、長い間の苦労、地道な努力を感じさせない笑顔で将来の夢を話してくれました。その様子は、すでに医師としての責任や風格すら備え、近い将来、患者に信頼される立派な医師になるであろうと強く感じました。翌朝、ホテルから見たプノンペンの風景は、高層ビル群と対照的な寺院やバラックのような建物が混在する不思議な街で、幹線道路に行きかう車は日本の高級車が目に付く都会の街並みでしたので、実態を十分に知らない私は「成長しているカンボジア」を強く感じながら、具体的な視察研修に入りました。

＜「アジア小児医療センター」訪問＞

アジア小児医療センターは、特定非営利活動法人ジャパンハートが新たに開院した病院で、前日に引っ越ししてきたばかりで、まだ工事をしている箇所もある中での訪問でしたので、本当に申し訳ないと思いつつ、スタッフの方からカンボジアの歴史、活動趣旨、当院設立の目的など幅広く説明をいただきました。中でも、１９７０年代のカンボジアの大量虐殺という暗い歴史が、現在に至る低い医療水準の根源となっていること、日本の小児がんの８～９割が治る病気となっている一方でカンボジアでは２～３割程度となっており、生まれた国による生存率の違い、サバイバルギャップをゼロにすることが活動の大きな目的であることが印象深かったです。その後、院内を見学させていただき、入院している幼児から中高生ぐらいの子供たちとガラス越しで面談をしました。言葉は聞こえませんが、どの子も入院治療中とは思えないほどの明るい笑顔で私たちを迎えてくれたことに感銘を受けました。一方で、先進医療を受けられる方は限られており、結果として患者を選別することになる現実といった医療現場での大きな課題を認識することができました。そうした中で、前述のサル―アンさんと同様に苦学の末に看護師となり若くして当院の看護部長として着任されたヴォッティさんから大江会長へ刺繍で「感謝」の文字を入れた額のサプライズプレゼントがあり、周囲は一瞬にして温かい雰囲気に包まれました。プレゼントは２か月前から手作りで準備されたそうで、その表情からヴォッティさんの優しさや思いやり、そして、仕事だけでなく何事もやり遂げる意思の強さを痛切に感じました。

＜「夢追う子どもたちの家」訪問＞

アジア小児医療センターから車で約１時間移動し、周囲はのどかな風景に変わり、赤茶色した未舗装道路をしばらく走っていると、少し先にかなりの人だかりが見え、たくさんの子供たちが私たちを外で待っていて出迎えてくれました。もっと調べてくればよかったと後悔しましたが、孤児院「夢追う子どもたちの家」では、５才から１０台後半の子供たち総勢９５人が生活していると伺い、その人数の多さに面喰いました。さっそく園内に入り、中庭の屋根付きのテラスで改めてあいさつをし、民族ダンスや民族楽器の演奏を披露してもらいました。ここまで準備するのも大変だったと思いますが、盛大に歓迎してもらったことは本当にうれしかったです。その後、子供たちが食べているものと同じ昼食をごちそうになり、園内を案内してもらいました。子供たちの部屋は、男女別に１０人ぐらいのグループに分かれており、二段ベッドが並んでいて決して広くはありませんが、子供たちの日頃の生活が感じられ、どの部屋も小さい棚に自分の衣服がきちんとたたんで置いてあったのが、とても印象的でした。また、自給自足するための農園もあり、野菜などの栽培から収穫も子供たちがやっていると伺い、大人のスタッフのサポートがあるのはもちろんですが、子供たちのコミュニティがしっかり作られていることに感心しました。一番印象的だったのは、子供たちの明るさ。大きい子だけでなく多くの子供たちのダンス好きには正直驚きました。自由時間には、同行した山田さんはもみくちゃになりながら盛り上がり、圓谷さんは持参したシャボン玉や折り紙などで幼稚園の先生のように輪の中心となって子供たちと遊んで、楽しい時間を過ごすことができました。そうした時間はあっという間に過ぎ、お別れの時。最後はテラスに整列して、日本語の歌詞で「さくら」と「勇気 100%」を合唱。初めて会う子供たちに楽しさや元気を届けられたらと思って訪問したのに、逆にいただく形になり、感謝の気持ちで一杯。不覚にも涙腺が緩んでしまいました。孤児院ですので、様々な理由で辛い経験をして家族と一緒に生活できない子供たちが、こんなにも明るく前向きに生活できていることに安堵した一方で、このような施設に入れない子供たちがどれぐらいいるのか、考えさせられてしまいました。

＜アラン・ランサイ中学校訪問・校舎見学・新校舎地鎮祭出席＞

前日に約３００㎞、４時間かけてシェムリアップ州に移動。アンコール・ワットに代表する世界遺産がある観光都市で再び大きな街に戻った形です。最初にアラン・ランサイ中学校に訪問し、新校舎の地鎮祭に参加させてもらいました。日本でも地鎮祭はありますが、海外の地鎮祭に参加する機会をいただいたことは大変貴重な経験になりました。大きな祭壇、たくさんのろうそくが立ち並び、果物や飲み物などの供物の中で豚の頭そのままが供えてあったのは本当に驚きました。お経のようなものを読み上げるのは日本と同じでしたが、参列者にストローが刺さったココナッツの実が振る舞われ、カンボジアらしさを感じました。当初予定では、旧校舎は取り壊されていたそうですが、許可が間に合わず、旧校舎はそのままでした。日本で言うと鍬入れの儀に当たるのでしょうか。数人の僧侶による読経が流れる中で、コンクリート床にあけた１メートル四方の穴にスコップで岩石や土などを入れる儀式も見ることができました。その後、校内を案内してもらいましたが、広い敷地、３階建ての校舎、パソコン室、図書室などのほか、水耕栽培のビニールハウス、工事途中でしたが魚の養殖池も作っており、とても充実した学校施設と思いました。

＜スレイ・ビボケイ中学校訪問・校舎見学・奨学金贈呈・奨学生との交流＞

スレイ・ビボケイ中学校は、アラン・ランサイ中学校から車で３０分程度の距離ですが、学校は広大な寺院の敷地の中にあり、道路も未舗装で、学校に近づくにつれて道路沿いのまばらにある民家はバラックやテントのようなものが目に付き、学校の周囲は森や遺跡に囲まれたとてものどかな場所でした。スレイ・ビボケイ中学校は、２０１３年に当社が一番初めに支援した学校であり、学校の敷地内にある小中高の校舎に当社の名前が入っているのを見て、これまでの取組みを振り返りとても誇らしく感じました。校内の見学後、奨学金の贈呈式があり、視察に参加している身でありながら子供たちに直接お渡しする機会までいただきました。そして、その晩は、奨学生との夕食会でした。奨学生たちは相当勉強してよい成績を残している優秀な学生で、皆、明るくて、とても誠実。トイレで男子奨学生３人から片言の英語で声を掛けられ、お互いの名前を交換。トイレの中で写真を撮って欲しいと言われたのには笑ってしまいましたが、素直で前向きさを感じる学生でした。また、セレモニーの締めはやはりダンス。多くの学生、先生方が一緒になって輪になり大いに盛り上がりました。私のような音楽に乗り切れないおじさんがかわいそうに見えたのか、一人の女子奨学生が丁寧にステップまで教えてくれました。ティナさん、本当にありがとうございました。クタクタになりましたが、多くの奨学生と交流することができ、とても楽しい一時を過ごすことができました。

＜ソムラン小学校訪問、校舎贈呈式出席、授業見学、授業研究発表会出席＞

ダンス疲れでぐっすり眠れ、翌日早朝にホテルを出発。約２時間でソムラン小学校に到着しました。学校前には、カメラを持った記者らしい方が数多く待機しており、校舎正門では子供たちが整列して私たちを迎える準備をしており、にぎやかなお祭りのようでした。校舎贈呈式には州知事も出席され、祝辞では日本の支援への感謝の言葉が繰り返され、一連のセレモニーは驚くぐらい盛大なものでした。式典後、古い校舎での授業を実際に見ることができたのは大変有意義でした。天井はトタン屋根一枚だけ、電気は通っているのですが、室内は薄暗く３人掛けの木製机がびっしり並んでいて一クラスの人数は５０人前後。先生は授業を進めるにパソコンを活用。生徒が答える際には、先生が生徒を当てるのではなく、前方のモニターに映し出された生徒の名前が入ったルーレットで指名するなどユニークな部分もありましたが、一人の先生ではとても見切れる環境ではありませんでした。後から聞いたのですが、子供の数が多く、授業が二部制のところもあるそうで、ここで初めて「校舎が足りない」現実と、教える先生方のご苦労など難しい実態を痛切に感じました。

＜スレイ・ビボケイ中学校奨学生の家庭訪問＞

最終日は、午前中、アンコール・ワット見学の時間をいただいた後にスレイ・ビボケイ中学校の奨学生であるパンナンさんの自宅を訪問しました。支援団体である公益社団法人ＳＳＦＣでは、奨学金給付の際には家庭訪問をおこなっていると伺い、現地でのきめ細かい対応の一例を知りました。パンナンさんにはお会いすることができましたが、前日の雨の影響で道路が冠水していて自宅まで行きつくことができませんでした。行程中のトラブルらしいトラブルと言えば、これくらいでしたが、雨期が終わる時期の雨でも冠水してしまう土地であることを目の当たりにしました。

＜まとめ＞

今回の研修を通して、当社が賛同し支援している公益財団法人スクールエイドジャパン、公益社団法人ＳＳＦＣ、特定非営利活動法人ジャパンハートの趣旨や活動について理解を深めることができました。そして、初めて行ったカンボジアの現在と過去、光と影、都心と地方の格差といった現実を見ることができました。「着実に発展してきているのに、どの程度の教育支援が必要なのか」との自問については、教育現場は着実に改善しているものの、実態としてはハード、ソフト両面の支援がまだ必要であり、また、医療現場での実態やサバイバルギャップの大きさを知ることで、当社の支援活動が意義深いものであると改めて認識することができました。プノンペンで「発展したカンボジア」を感じましたが、初日の夜に大江会長が話されていた「発展はしているが自立はしていない」と言う言葉の意味がようやく理解できたと感じています。まだ成長途上ではありますが、多くの子供たちがサルーアンさんやヴォッティさんのように努力し自立することによって飛躍的に成長する余地は十分にあると確信しており、改めて教育の大切さを痛感しました。

現地での総移動距離はおよそ５００㎞。移動時間が長かったですが、予定どおり、病院、孤児院、学校３校を回り、各施設の見学、新校舎地鎮祭、校舎贈呈式、奨学金贈呈式、授業発表会、家庭訪問など様々なイベントに参加させていただき、現場の課題や実態を知り、先生やスタッフの方々、そして何より多くの子供たちと直接触れ合うことにより、冒頭の「現地に行って見ること」の素晴らしさを体感できたことは生涯忘れることはない貴重な体験となりました。

このような機会を与えていただいた大江会長、小池社長、同行して盛り上げてくれた山田さん、圓谷さん、現地でサポートいただいたＳＳＦＣの小林さん、スクールエイドジャパンの清宮さん、ジャパンハートの皆さん、通訳のサラさん、ピンさんほか多くの方々に心から感謝申しあげます。本当にありがとうございました。

以　上

【プノンペンの街並み】

【早朝のシェムリアップ郊外】